

唄が生まれる島

今月も南大東島です。不思議な島です。島なのに耕地が広く、大きなハーベスターが使われています。出生率は3人を超えます。お年寄りをほとんど見ません。島の道では、必ず車に出会います。だから、島に行くと活気を感じます。

いっぽう、島なのに泳げる場所がありません。断崖が島を取り囲み、遠浅の浜がありません。しかも目の前の海は太平洋です。波止場でマグロが釣れますし、サメも泳いでいるそうです。入り江がありませんので、港といっても外海です。波が荒いので、船は岸壁から離れて停泊し、旅客の乗・下船は荷物と同じ扱い。クレーンで岸壁からつり上げます。

不思議なことがいっぱいなのですが、なかでも不思議なのは、民謡歌手が何人もいること。筆者が知るだけでも内里美香さん、ボロボロジノ娘、濱里保之（大東島の濱ちゃん、自称、日本三大浜ちゃん）のお三方がCDを発売されています。新垣民謡研究所という指導機関もあります。ひよっとすると、CD発売者密度が日本一ではないか、と思ったりしています。

なかでも濱里保之さんは、魅力的な方。島

中嶋哲夫の「人事も歩けば」



▲南大東島西湾

を心から愛する国士のような方。夜を徹して酒を飲み（それも島特産のコレコレというラム酒）、唄を作り、歌う。ブログで島の情報を発信。本業は公務員（役場の産業課長）。

濱里さんが作る唄は沖縄の島唄と八丈島の文化を融合させた南大東の唄です。おじゃりやれ、アバヨーイ、大東アンマク、大東塩梅節、ボロジノアイランド、汽車ぼっぼ、役場職員の唄。すべての唄が大東島を歌った唄。島の歴史が歌い込まれ、八丈島と沖縄の方言が用いられます。ミックスされた歌詞を作っておられます。一緒に酒を飲むと何曲か唄ってくださいます。島のスナックでは、濱ちゃんの唄がカラオケの人気曲です。

社歌や校歌など、コミュニティー・ソングを地元の人がつくり、地元の人が唄う。有名な作詞家や作曲家に依頼した曲にはない本物さを、そこに感じます。島の皆さんが、島の将来を想い、島を愛する。すべての考えを自分の生活の場から考える。そんな「国士」の曲は、人々の思いが、濱ちゃんという人物の姿を借りているように想います。

（MBO実践支援センター代表）